

在家仏教講演会 開催ご案内

東京 時間：午前10時～11時30分
会場：中野サンプラザ7階研修室10（中野区中野4-1-1）
会場整理費：700円 お問合せ：03-6684-6692

5月12日（土） 仏教と文学—古事記と仏教
瀬間正之 先生 上智大学教授

5月26日（土） あらゆる仕事は「道」に通ず—鈴木正三に学ぶ
加藤みち子 先生 東方学院講師

6月 9日（土） 万葉集と仏教
鉄野昌弘 先生 東京大学教授

6月23日（土） 祈りかつ働き—信者は儲かるのか
深井智朗 先生 東洋英和女学院副院長

9月 8日（土） 仏教と文学—芭蕉俳諧と仏教
清登典子 先生 筑波大学教授

9月22日（土） 良寛和尚の「法華讃」を味わう
中野東禅 先生 曹洞宗龍宝寺住職

10月13日（土） はたらく力となる宗教—宗教社会学者ベラーと近江商人の真宗を中心に
ケネス田中 先生 武蔵野大学教授

10月27日（土） 生きるとは労働である
田上太秀 先生 駒澤大学名誉教授

大阪 第3金曜日 午後3時～4時30分
会場：堂島アバンザ5階または14階（北区堂島1-6-20）
会場整理費：500円 お問合せ：03-6684-6692

5月18日（金） 往生伝にみる<笑み>
池見澄隆 先生 仏教大学名誉教授

6月15日（金） 医療現場で求められる仏教
田畑正久 先生 龍谷大学教授

9月21日（金） 佛陀が教える心の時代
山田法胤 先生 薬師寺長老

いのち尊し

「正法眼蔵随聞記を読む」

相澤 一男

（在家仏教協会理事）

第13号
いのち尊し
平成30年 5月1日
公益社団法人 在家仏教協会
〒101-0062
東京都千代田区 神田駿河台3-3 五明館ビル202号
TEL 03-6684-6692
FAX 03-6684-6709

「正法眼蔵随聞記」はずいぶん昔に手にしたことがある。大戦前、東京の大学に通っていた叔父が学業成って故郷へ帰る時、数冊の書物をわが家に置いていったが、なかに薄い岩波文庫の「随聞記」があった。当時中学初年の私には、その書名が読めず。読んでくれる人も周囲にいなかった。

はるか後年になって「随聞記」を読んだ。私が「正法眼蔵」を読むことを発心したのは昭和六十年だが、「随聞記」を読んだのもその前後と思う。「正法眼蔵」は私には大へん難解で、壁の如く立ちはだかっているという感じだが、「随聞記」はまるで違って、むしろ引き込まれるようにして本の中に入る事ができた。

宋国から帰り、釈尊の正法を伝

えるべく、満を持していた道元が宇治に興聖寺を開いたのは一二年、三年、その翌年、懷慧が会下に参じた。後に永平寺二世となる懷慧は、道元より二歳年長だが、侍者として道元に近侍、終始その傍らにあつて、師の教えを片言隻語も聞きもらさじと記録し、四年に及んだ。懷慧はこの記録を公表する意図はなく、死後弟子たちにより「随聞記」六巻としてまとめられたが、おのずから道元教団早期の緊張感にみちた歳月を語るあざやかな記録となった。

道元は修行僧たちを「学道の人」と呼び、そのあるべき姿をくり返し説いた。学道の人は自分のために仏法を学んではならない。ただ仏法のために仏法を学ぶべきだ。

道元は修行僧たちを「学道の人」と呼び、そのあるべき姿をくり返し説いた。学道の人は自分のために仏法を学んではならない。ただ仏法のために仏法を学ぶべきだ。

「わが身心を一物ものこさず放下して仏法の大海に回向すべきなり」「学道の人、すべからく寸陰を惜しむべし。露命消えやすし、時光すみやかに移る。余事を管ずることなく道を学ぶべし」。また宋国天童寺の如浄禅師のもと、苛烈な修行が続けられていたことが語られている。

「随聞記」の最後の章は「学道の最要は坐禅これ第一なり」ではじまり、「まさしき功は坐にあるべし」の一語で終る。

私は当時、総持寺の日曜参禅会に参加していた。定められた時間の坐禅が終わったあと、老師を囲んで話しあう会があり、私は毎回出席していたが、ある時「随聞記」が話題になったことがある。老師は、これは聞いた話だが、と言つて次のような話をしてくれた。

戦時中、学徒出陣があり、多くの学生が学業を捨て戦場に赴いたが、その学生たちの心のよりどころとして、最も多く読まれた宗教書は、この「随聞記」と「歎異抄」

の二冊だったという。両書とも薄い岩波文庫で、かなりの部数が刊行されたらしい。

話を聞きながら思い出したのは、かつて叔父が置いていった「随聞記」のことだった。叔父は学徒出陣の学生たちよりいくらか先輩で、また病気のため軍隊には行かなかったとも聞いている。それでも戦時下の学生として、ゆれる心情があったからこそ、この書を求めたのではないか。実際に読んだかどうか、本は汚れがなく真新しいものだったという記憶があるが、叔父は早く亡くなったので聞くことはできなかった。

むろん読んだ学生はいただろう。読んでどう思ったか、学道の人への呼びかけを、どう受けとめたか。「随聞記」を手にするたびに、同じように大戦下を生きた後輩の学生の一人として、この書につきつめた思いで向かったであろう学生たちに、ひととき思いが及ぶのである。





# 仏教と私

近江商人の里を訪ねて

常包芳樹  
(在家仏教協会会員)

急に暖かくなった三月末、体の方も春に触れたいと目覚めたのか、旅行に出ようと思いついた。名利仏像の豊富な関西にしよう。開花宣言もあり桜も楽しめる。この機に近江商人の里も歩いてみようと思いついた。

JR近江八幡駅で近江鉄道に乗り換え、五個荘駅で降り無人の改札を通る。田園風景を目にしながら二十分ほど歩くと、目標とする近江商人の里に到着。まず博物館に足を運んで基本知識を身につける。

\*

近江商人は琵琶湖周辺の幾つかの地域から輩出されたとのこと。豊臣秀次の築いた城下町でもある近江八幡からの流れと、ここ五個荘のような農村地帯から全国に広がるに出た人々など、生誕の地は分かれる。また、時期も徳川幕府以前からの勃興を含めて違いがある。「売り手よし、買い手よし、世間



よし」の精神で、江戸時代の商工業の発展に際立った足跡を残したのが近江商人と頭に入っていたが、一括りの理解ではおさまらない面もあるようだ。

近江商人が活動した地域を示すパネルから、鎖国以前、遠くベトナムまで出かけた人々の存在を知る。未だ封建時代の世にあつて、積極的に外地へ向かった近江商人の話に興味は掻き立てられる。今日なお、近江商人を淵源とする企業が存続しているとの展示もある。近代の産業化の波を潜り抜けながら、近江商人の精神はなお生き続けているのか知りたくなる。

その精神は「三方よし」とも表現されている。関係利害者のバランスを保ちながら、事業を進展させ

た近江商人のあり方は、経営における社会的責任や企業倫理の問題を考える上で参考になる、と語る経営学者も少なくない。その源泉はどこにあるのか企業不祥事も続く中で、関心をひくようだ。商家に残された家訓を調べると、信仰心の篤さが浮かび上がると指摘されてもいる。

売店で末永國紀著『近江商人学入門―CSRの源流「三方よし」』を購入する。序論に「この三方よしは日本発祥の世界経営遺産と言えよう」とある。世界遺産を擁する奈良、京都に近接する地から生まれてきたことを思うと、言いえて妙。ただし、これは形のない、目に見えない遺産だけに、仏像や建物とは違う方法での伝達が必要になる。生き物に譬えられるように経営は日々変化していく。その中で近江商人の持っていたような精神を持ち続けるためには何が必要か考えさせられる。

その後、白い壁や蔵が残る近江商人の住居を見て歩く。一角に浄土真宗の寺が立つ。境内は森閑として人の姿を目にすることなく、本堂の前に敷き詰められた砂利は整然として人の足が入った形跡もない。商人の活動が隆盛を誇る往

## 動画配信中の講演会

8月号 田上太秀先生『相手の力となり身となる心』  
9月号 島菌 進先生『仏教倫理思想と慈悲』  
10月号 山崎龍明先生『慈悲の究極』  
11月号 渡邊寶陽先生『信仰者の足跡を偲ぶ』  
12月号 石上善應先生『慈悲―いかにうけとるべきか』  
1月号 大井 玄先生『ブツダと老耄』  
2月号 福田亮成先生『弘法大師の社会事業』  
3月号 青山俊董先生『ほほえみと愛の言葉』  
4月号 ケネス田中先生『世の幸せは私の幸せ』  
5月号 阿満利磨先生『「あの世・この世」と「浄土・現世」』

奈良康明先生『仏への道』と『仏の道』  
本多弘之先生『大乘の涅槃と大悲の本願』  
山折哲雄先生『確信の(小乗)と迷いの(大乘)』  
木村清孝先生『華嚴思想とさとりの世界』  
中野東禅先生『生存(苦)がある限り仏の悲智は輝く』  
島菌 進先生『仏教倫理思想と慈悲』  
渡邊寶陽先生『信仰者の足跡を偲ぶ』  
大井 玄先生『ブツダと老耄』  
青山俊董先生『ほほえみと愛の言葉』  
伊藤 益先生『悪人の往生―歎異抄第三条をめぐって』  
竹村牧男先生『唯識の生死観―阿頼耶識縁起ということ』  
田上太秀先生『なぜ生れ、老い、そして死ぬのか』  
武田定光先生『時間論で考える「往生と成仏」』  
菅原伸郎先生『宗教と労働―はじめに』  
他二十本配信

時には、親鸞聖人の教えに耳を傾け、仲間と念仏を称えたいと思う人々が盛んに寺門を通り抜けていたのだろうと想像する

\*

五個荘駅に戻り、再び近江鉄道に乗って、近江八幡駅で下車。バスに乗り近江商人の生活ぶりを留める地域に向かう。堀には桜が咲き、外国人観光客が白壁を背景に写真撮影している。東京に比べればのどかな雰囲気ではあるが、建物も連なっており、五個荘と違ってこちらは市街地だ。この城下で商売をしていた人々は武士との交際も盛んであったのだろう。

八幡商人は早い時期から江戸は日本橋界隈に店を出していたようだ。近江八幡のような都市型と、五個荘のような農村型に区分して考えるとどんな違いが見えてくるのだろうか。上記の末永氏の本には、財政に窮する大名からの支援要請を受け入れた商人は没落し、きつぱりと申し出を断った商人は隆盛を保った事例が掲載されている。都市、農村での生活環境、武士、商人、農民の身分制度、これらの違いを超えて「三方よし」の精神がどう働いたのか、関心はいっそう深まった。

## 「いのち尊し」投稿規程

◇随想「仏教と私」(八百字まで、または千五百字まで)  
人生を振り返って仏教と出逢ったときの感動などをお書きください。  
◇コラム「この一冊」(八百字以内)  
感銘を受けた書籍を紹介してください。新刊だけでなく、思い出しの本も歓迎します。著者名、出版社名、発行年を忘れずに。

\*

原稿用紙またはメールに添付して、左記宛てにお送りください。住所、氏名、電話番号、できれば職業と年齢もお書きください。読みやすくするために、あるいは編集上の都合で、趣旨を変えない範囲で削ったり直したりする場合があります。採用文には薄謝をお送りします。また、不採用の原稿はお返ししませんのでコピーを手元に残してください。

原稿の送り先は〒101-0001 東京都千代田区神田駿河台3-3 五明館ビル202号  
在家仏教協会「いのち尊し」係。  
メールはinfo@zaikubukkyo.com

# 在家仏教通信

## 講演会動画を配信、講演録を月刊誌「大法輪」に掲載中

在家仏教講演会をより深く理解していただくために、会員の皆様には、ネットでの動画配信に加え、講演録を掲載した月刊誌「大法輪」をお届けしております。平成30年6月号は、末木文美士先生執筆の「日本人の死生観と仏教」です。

## 「大法輪」掲載の講演録

6月号 中野東禅先生『生存(苦)がある限り仏の悲智は輝く』  
7月号 武田定光先生『無縁の大悲』

## 入会のご案内

協会では会員を募集しております。協会の発展のためにご協力を宜しくお願い致します。  
氏名、住所、電話番号を協会事務所あて連絡下さい。会費の振込用紙をお送りします。  
年会費  
賛助会員 一万七千円(一口)  
正会員 八千円